BROTHERFOOD

紺坂　紫乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＲＯＴＨＥＲＦＯＯＤ

【Ｎコード】
Ｎ２５４３ＢＡ

【作者名】
紺坂　紫乃

【あらすじ】
―荒野を駆ける賞金稼ぎ　夷荻（いてき）と諒司（りょうじ）。

自由に、気ままに。

戦いの中に悦びを見出す二人の死神は今日も血煙の中に生きる。

※サイトに掲載している作品をそのまま掲載しています。

サイト名：咲くやこの花<ｈｔｔｐ：／／ｓａｋｕｋｏｎｏ４．ｂｌｏｇ．ｆｃ２．ｃｏｍ／>

1

不毛な大地に吹きすさぶ風はなんとも荒んだ心持ちにさせるというものだ。
陽光は微塵の容赦もなく地を焼き、湧き上がる熱風は体力を根こそぎ奪っていく。周りを見渡せど、剥き出しの岩棚とどこまでも赤茶色の地平線が広がるのみである。
そんな中、夷荻と諒司が休憩を取っている場所は、四本の鉄パイプの上に分厚めの日除け布を張っただけのテントというにはあまりにも粗末なものだった。

「りょーちゃーん…これ、俺、もう限界…。」

大の字に寝転び小さな避暑地の大半を占拠した夷荻が、地面に突き刺した大剣に持たれてじっと目を閉じていた相方に訴えかける。大きく首元が空いたカーキ色のカットソーはその色味も相まって汗がぐっしょりと滲んでいる様が一目でわかるほどだ。一方の諒司は額にじんわりと汗を浮かばせている程度の様相で腕時計を確認する。

「報告によると、そろそろなんだよなぁ…。」
「そろそろって、もう何時間こうしてると思っ…！！」
ぶつくさと不満を口にしていた夷荻が突如目を見開き、飛び起きた。

「来た！　諒ちゃん、行こう！！」

寝転んでいた故か小さな地鳴りを察したようだ。
夷荻は両脚に着けたホルダーに収納されている銃を慈しむように触れ、渇いた唇を舐めて水分を移す。先程の体たらくはどこへやらと、子供のようなその様子に諒司は微かに笑むとゆっくりと立ち上がる。

だが二人が纏うものは穏やかさなどではなく、獲物が来たという事実からなる狂喜を孕んだ高揚感だった。

＊

轟音を響かせてバイクを駆る厳章は上機嫌であった。
数多の街から収奪を繰り返してきた厳章ですら、今日の上々の守備には喜びを禁じ得ない。彼の後ろを追ってくる手下達にも、あれだけの金品を手にして騒ぐなという方が無理な話だろう。
３０数名にも及ぶチームは、各々これから戦利品が与えてくれる恩恵を仲間達と語り合いながらバイクを駆っていた。しかし欲が肥大するのもまた人の哀しい習性である。この先にもオアシスが一つあったはずだと見当をつけた厳章は、善は急げとばかりに後方の手下達に威勢よく声をかけた。

「野郎共！！ついでだ、この先の街からも頂いていくぞ！！」

頭領からかかった声に場の盛り上がりは最高潮に、おおっと大きな合いの手がかかるはずだった。そう見当をつけていたというのに、なぜかその声は尻すぼみに消える。拳を作った片手を高らかに揚げている者もいるが、皆一様に不思議な面持ちをして厳章を見つめていた。いや、正確には彼の頭上を、だ。
面白くない反応に渋面を作った厳章は、手下達が見つめる方へと顔を返す。するとそこには彼が騎乗するバイクのハンドルに若い青年が立ち、二挺の銃口を厳章へと向けていた。

「なっ…！！！」

「おっと…！」

驚いた厳章は咄嗟に急ブレーキをかけるが、青年は振り落とされるどころか高く宙を舞う。そして空中で反転させた態勢で、喜々として幾度も引き金を引いた。連射された鉛玉は寸分の狂いなく手下達の眉間や車輪へと打ち込まれる。辺りは倒れたバイクが撒き散らす砂埃と血臭が入り乱れ、阿鼻叫喚のこだまする凄惨な場へと変貌を遂げた。

「な、なんなんだ、てめぇは！！」

空からの殺戮を終え、軽やかに荒野へ着地した青年に拳銃を向けた手下の一人が彼に拳銃を向けて問う。

「ただの賞金稼ぎさ。」

その問いの答えは背後から返ってきたが、バイクごと顔面を大剣で真っ二つにされた彼は果たして理解し得ただろうか。

「あ、ずりぃ！　チームの前半分は俺が殺って良いって言ったじゃん！」

自身と同じ丈程もある剣を肩に乗せる男に、銃を携えた青年が不満を露わに投げかけた。

「後ろはとっくに終わってんだよ。」

男の言葉に急いで振り向いたのは厳章であった。後方は己を取り巻く以上の惨状が繰り広げられており、二十を超える人もバイクでさえ、元の形状を保っているものを探す方が困難な程だ。

血の海とは正にこの光景を指すのだろうか。これを目の前の青年達がやってのけたのかと思うとさすがの厳章も多少の戦慄を覚えたが、それを面には出さず苦々しげに言い放った。

「お前らみたいなガキ共が、賞金稼ぎだと…？！」

確かにこれまでの行いから、厳章の首には高額の懸賞金が懸けられている。それを目当てに突っかかってくる連中がいなかった訳でもないが、たった二人でこの地域最強を謳われたチームを潰せる二人組など聞いたことが無い。

「と、頭領…。こいつら、“夷諒”っすよ…荒野の、死神」

砕けそうな程歯を食いしばる厳章に対して、後ろ隣にいた生き残っている手下の一人が、歯の根が噛み合わないうわずった声で厳章に伝えた。

「ちっ…こんなふざけた若造二人が保安局お抱えの身かよ。死神だとか言われて調子こいてんじゃねーぞ！！」

意地でもこのままでは終わらせられないとばかりに、怒りに駆り立てられた厳章はバイクに装備させていた散弾銃を身構え引き金に指をかけた。

「別に調子に乗った覚えは無いけどね。」

「俺らは楽しめりゃ良いんだよ。」

しかしそれが役目を果たすことはならなかった。

いつの間にか左側に立っていた夷荻が指ごと撃ち、諒司の剣が厳章と手下の首を共に斬り飛ばした。鮮血が青い空に紅い弧を描く。

「バイバイ。」

2

諒司は塵一つない磨かれたオーク製のデスクの上に、どんと乱雑に厳章の首を置いた。

「お約束の品だ。」

デスクの向こう側に座しているイル・バトル零級保安官は、咥えていた煙草を灰皿に押し付けてもみ消した。そして眼鏡のブリッジをくいっと上げ、差し出された首を細部までまじまじと確認する。血糊が付着した青白い男の首を検分する手に臆した風は欠片もない。

「人相とピアスの数、そして眼球の虹彩情報…特徴は確かに報告と一致している。厳章・コウライで間違いはなさそうだ。」

確認し終えると、イルは諒司ににやりと口角を上げて見せた。

「麓州が手を焼いていた厄介者だったが、さすがだな。」

「お褒め頂きどーも。それよりも早く報酬をくれ。なんのために解剖班を通さず、直々にあんたのところに持ってきたと思ってんだ。」

「なんだ。久しぶりに私に会いにきたついでじゃないのか。」

「ちげーよ！夷荻が腹減ったってうるせぇから、とっとと金だけ受け取りにきたんだろうが！」

諒司が指差した背後では、高級そうな革張りのソファに全身を投げ出して「はーらー減った。死ぬー。」と先程から夷荻が喚いていた。ここに来るまでの道中、相方の腹の虫と文句を聞かされ続けたせいで諒司の苛つきはピークである。

元来賞金を得るための正式な手順としては解剖班の検視結果を待ち、発行された証明書を州の統括係が調べて誤りがなければ換金所に提出する許可を貰える。これで初めて賞金を手にすることができるの

だが、この方法では最低でも一日、長ければ三日はかかる。あまりにもやかましい夷荻の訴えに辟易とした諒司は、あまり使いたくない方法ではあったが、入国後すぐに直属の上官であるイルの元へと足を運んだ。それは彼女の目視で人体の構成要素を識別できる特殊能力と零級保安官という立場を買ってのことでもある。

くすくすと笑っていたイルもその様子を察したのかデスクから一枚の小さな紙片を取出し、それに手早くペンを滑らせ必要事項を記入し始めた。流れるような署名と蝋の捺印を済ませると、諒司に渡す。奪うようにそれを受け取ると、ソファでだらけきっていた夷荻の首根っこを掴み、足早に部屋を後にしようと扉へと向かう。これまでの経験上、ここでの長居は禁物だと身に染みているのだ。

「ああ、そうだ。次の現場は蘇州だからな。精々がんばれ。」

まさにドアノブに手を書けたその瞬間、案の定さらりとイルが背に爆弾発言を投げかけてきた。当の本人は新しい煙草に火をつけて美味そうに吹かしている。動きが固まるがこの女のことだ、拒否したところで詳細は後程嫌でも聞かされるだろうと、諒司は振り返ることなく部屋を出て行った。夷荻は引き摺られながらも、バイバーイなどと返している。

「さて今度は一筋縄ではいかんだろうなぁ。」

イルはなんとも楽しそうに蘇州の案件が書かれた書類を指先でひらひらと摘み、大きく吸い込んだ煙を空に吐き出した。

＊

「トアン保安局特別認定派遣員　諒司・ミツルギ。」

「同じく夷荻・サンジョウ。賞金下さい。」

イルの執務室を後にした二人は、同じ建物の一階隅に設けられた換金所で左腕の袖を捲くり上げて、いかにも堅物そうな中年の監査官に各々の身分証明であるタトゥーを掲げていた。監査官は二人のタトゥーと諒司が差し出したイルのサインが入った書類を無言で交互にまじまじと見つめるだけで、それ以上の動きは無い。
さすがに疲れから二人の腕が震えだす頃漸く納得したようで、彼は奥に下がり賞金７００万シーカーを持って現れた。しかし余程用心深い性格なのか、受取書にサインを終えて換金所の敷地を出るまで監査官の視線を注がれる羽目になった。そして一歩外へと踏み出した瞬間、まるで打ち合わせたかのように今まで受け止め続けたそれを振り払おうと、猛ダッシュで馴染みのレストランバーへと飛び込んだ。

「イル姐を通すとアレがあるから嫌なんだよ…。」

心底ぐったりした様子で諒司が手にしたフォークで鶏肉をつつきながら積み上がった皿の向こう側に呟いてみた。アレとは先刻の換金所でのことだろう。しかし問いを投げかけたにも関わらず夷荻からの応答はなかった。唯一の相方は真向いにいるにも関わらず、皿の山を作り上げることに必死なようで聞こえているのか否かも怪しい。どちらかというと細身といえるあの身体のどこにあれだけの食物が収まっていくのか、長い付き合いだが相も変わらず謎だなと諒司は思った。
だが夷荻と比べて食欲は人並みである諒司も、この日ばかりは少々食べ過ぎたかと思うくらいの満腹感を感じていた。苦しいながらも心地よい余韻に浸りながら胸ポケットから煙草の箱を取り出して一本咥え、紫煙を燻らせて次の派遣命令が正式に届くまでの自由時間をどう使おうか思案する。久しぶりに女のところでのんびりするかなどと考えていた時、ふと視線を感じて振り返る。
すると出入り口付近に立っているマントを羽織った人物と目が合っ

た。黒い髪を天頂部で一つに纏めて団子状にし、大きな双眸の下瞼には赤黒い隈取を施した少年とも少女とも取れる容姿である。背丈は夷荻と同じくらいだろうか。しかし換金所の監査官から受けた視線とはまた違った雰囲気に眉間に皺がよるのを感じていると、

「りょーちゃん、どしたの？」

口をもごもご言わせながら剣呑な空気を察したのか、夷荻がようやく皿の山の側面から顔を覗かせた。それと同時に隈取の人物は視線を外し、何事もなかったかのように出て行ってしまった。

「なんだったんだ、あいつ。」

「今日はよく見られる日だねぇ。」

口の周りに食べかすをつけた夷荻が、暢気に出入り口を見ながらそうぼやいた。片手には食べかけの七面鳥の脚を握っている。それを見た諒司は一つ溜息をこぼす。

「良いから、とっとと食い終われよ。」

「遅かったな、ミャオ・ルー。」

戸口に背を持たせかけた大柄の男は短く刈り込んだ蒼い髪を撫でつけ、ようやく店から出てきた連れ合いにそう声をかけた。ミャオ・ルーと呼ばれた隈取の人物は男に口だけで笑む。

「“夷諒”を見つけたんダ。なんだか想像していたのとはだいぶ違うネ。」

それを聞いて男は口笛を一つ鳴らした。

「ほう。死神達はご帰還だったかい。」

「うん。まぁ、いずれどこかで鉢合わせるだロ？その時は楽しめそうな気がしたヨ。ところで次はどこに行くノ？」

「蘇州だ。鉱山に住み着いた賞金首が狙い目だと思ってな。」

「ふぅん…僕は楽しめたらなんでも良いヨ。」

砂避けの為とはいえ、すっかりくすんでしまった長いマントを翻し
二人は小さな砂嵐の中に消えて行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2543ba/

BROTHERFOOD

2012年1月6日15時51分発行